

いのちに寄り添う

「生きる」現場で ①

住民が「運営者」

ジャーナリスト 北村 敏泰

静かな山間の里に歓声が響く。滋賀県甲賀市の浄土宗徳源寺で7月中旬に開かれた「ごはんの会」には、いつものように高齢者や子育て世代、子供たち50人余りが詰め掛け、屋外での餅つきと食事を一緒に楽しんだ。

毎月開く食事会

大津市街から車で数十分、旧信楽町の過疎の地区をもつて地域に親しまれ人々が集まるような場にと2016年から始め、毎月内容を変えて昼や夕方に開いている。やりくりする副住職の妻の西山綾瀬さん(38)は「前は、若い人は疎遠、お年寄りも何か用事でお布施を持ってでないと来れない。寺の敷居を切り下げる、何もなくても来られるために企画しました」と話す。これまで定番のカレーや芋煮、バーベキューや珍しいインド料理などを用意し、高齢者を副住職が送迎、受け付けから配膳、片付けなどは参加者です。

世代を超えたつながり 山里に



「ごはんの会」の餅つきで世代を超えたつながりが生まれた

滋賀県甲賀市・徳源寺

家族連れが次々集まって来た。綾瀬さんの掛け声でまず中年男性や副住職らが杵を振り下ろす。すると「もつぶ、こづくるんや」と高齢の男性が進み出、慣れた手つきで手水の付け方やつき方を教える。

感嘆の中で立派に餅ができ上がり、二日目は、駐車場に敷いたシートで待ちきれずにそわそわしていた子供たちも順に杵を手にすく。大人たちが取り囲んで声援を送ると、今度は初老の女性が祭り囃子で吹く横笛を取り出し、伴奏にと軽妙な音色で演奏し始めた。ひときわ拍手が高まり、まことに金賞で盛り上がった。